スペシャルコラム

アイルランドからきたピーターさん

Part. 2

現存する最古の歌集である『万葉集』を構成する和歌は、飛鳥時代から奈良時代にかけて詠まれたもので、範囲は当時の都、つまり奈良周辺だけでなく、山陰地方を含む全国各地に及んでいる。

どの地域が歌に多く詠まれたかを知る手掛かりとなるのが、歌に現れる具体的な「地名」である。『万葉集』には約1200種の地名が登場するが、そのうちおよそ300種は大和国（現在の奈良）の地名である。都があったとはいえ、全体の4分の1となると、決して少なくない。もう一つの大きなグループは、大和をとりまく現在の大阪、和歌山、三重、京都、滋賀などである。これらの地域もやはり約300種の地名が詠われている。大和とその周辺地域は、『万葉集』に地名をとどめる二大勢力といえる。

続く第三のグループも都に近い地域だろうと思われるかもしれないが、実は、長野や静岡から東の国々である。東歌（あずまうた）や防人歌（さきもりのうた）も収めた『万葉集』だけに、大和から遠く離れた東国の地名が意外に多いのだ。第四のグループは筑紫、つまり大宰府があった今の福岡を中心とした九州地方だ。大宰府は、朝鮮半島や中国大陸に開かれた西の玄関口であり、大伴旅人や山上憶良といった有名歌人が多くの歌を詠んでいる。そして第五のグループは越中（今の富山）である。『万葉集』に馴染みがない人からすると意外かもしれないが、これは、『万葉集』の最終的な編纂にかかわった大伴家持が越中守（現在ならさしずめ富山県知事）として5年間赴任していたからだ。

そしていよいよ次に登場するのが、益田を含む現在の島根西部、すなわち石見である。島根といえば、神話でも有名な出雲、つまり東部の方が多くても不思議ではないが、実はそうではない。『万葉集』屈指の大歌人である柿本人麻呂は、地方官吏として石見に赴任したとされ、その際に詠んだ歌が多く残されており、益田で没したという伝承も根強い。石見国から離任するにあたり、この地で巡りあった妻との別れを惜しんだ歌が『万葉集』に10首残っていて、多くの地名が登場する。さらには、妻の依羅娘子（よさみのおとめ）が人麻呂の死を悲しんだ歌も印象深い。石見が「万葉の故地」とされる由縁である。

『万葉集』の詠み手たちも、多くの万葉歌に触れられる島根県立万葉公園がこの地にあり、益田市民が今なお『万葉集』に深い親しみを持ち続けていることを嘉しているに違いない。念願の訪問がかなった私も実際のところ、いっぺんに益田が好きになり、人麻呂がこの地への惜別の情を詠んだ「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」（石見の高角山の木々の間から私が振る袖を妻は見ているだろうか）という歌と同じ感慨を抱いた。実はこの原稿を書いている今も、早く益田市を再訪したくて仕方ないのだ。

問 市観光交流課　☎31-0331

翻訳家・版画家・詩人
ピーター・J・マクミラン

アイルランド生まれ。アイルランド国立大学ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンを首席で卒業後、同大学院で哲学の修士号、米国で英文学の博士号を取得。プリンストン、コロンビア、オクスフォードの各大学で客員研究員を務める。渡日後は杏林大学教授、東京女子大学講師を歴任。現在は相模女子大学客員教授、東京大学非常勤講師を務める。2008年に英訳『百人一首』を出版し、日米で翻訳賞を受賞。2016年に英訳『伊勢物語』、2017年に英訳『百人一首』の新訳を出版。また、アーティストとして「西斎」名義で版画制作活動を行っている。日本での著書に『日本の古典を英語で読む』『松尾芭蕉を旅する』など多数。朝日新聞で「星の林に」、京都新聞で「古典を楽しむ」を連載中。

益田市は、東京2020パラリンピックでのアイルランドサイクリングチームの事前キャンプ受入れを契機にアイルランドとの交流を進めています。スペシャルコラム『アイルランドからきたピーターさん』では、アイルランド出身で益田市ともご縁のあるピーター・J・マクミランさんのコラムを全4回にわたってお届けします。第2回のテーマは「万葉集と山陰地方」です。